シリーズ　私の一冊の本

薬学部　齊藤真也　先生

ドナルド・C・ゴース，　ジェラルド・M・ワインバーグ　著

『　ライト、ついてますか　：　問題発見の人間学　』

閲覧室1階　　141.5/　G27　　共立出版

大学での勉強と高校までのそれの違いを説明するのに、「高校までは正解のある問題を解いていたのに対して、大学では正解がわからない問題に取り組んでいる」というような表現を聞いたことはないでしょうか。大学入学までは正解へ素早く到達する訓練を積み重ねてきたのに対して、大学を卒業するまでの勉強は、解けるかどうかわからない問題に取り組み、それを解く（あるいは解くための努力をする）ことに重点が置かれています。

では解けない問題が解けるようになる、というのは高等教育の目標なのでしょうか？　実際にはこれだけでは片手落ちで、最終的には適切な問題を設定する能力を身に付けることが目標でしょう。問題を設定し、それから解けるかどうかわからないこの問題を解決する。そのトレーニングを私たちは大学から大学院の過程で行っているのです。

そこで『ライト、ついていますか』という本の登場ですが、この本は副題に『問題発見の人間学』と書かれているように、いくつかの（必ずしも正解のない）問題を例に、適切な問題とは何かを読者が考えていく構成になっています。問題がそこにあれば何を解くかは明白だと思いがちですが、実際には問題一つにも様々な面があり、「誰にとって」「何を目的として」「何を解決すべきなのか」という点は必ずしも明確ではないことをこの本は読者に教えてくれます。適切な問題というものは、多角的に検討して初めて導き出せるようになるわけですが、この「多角的な視点」がどのようなものであるかを認識する、という点も本書の隠されたテーマです。例題は少し奇をてらっているし、解決できない問題もあり、却って問題点が分かりにくくなっているところもありますが、自分の視野を広げるにはよいきっかけになるのではないでしょうか。

ちなみに本書にいくつも挙げられる教訓の一つに「キミの問題理解をおじゃんにする原因を三つ考えられないうちは、キミはまだ問題を把握していない」というものがあります。これは多角的に自分がその問題を把握しているかどうかを知る指標なのですが、もし三つ以上考える事を習慣にしていれば、論文発表時の意地悪な質問への対応などは赤子の手をひねるようなものでしょう。